

終末前主日 説教 「求めなさい。そうすれば、与えられる」 要旨  
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021年11月14日

マタイによる福音書 7:7~14

新型コロナウイルス感染症がもたらした影響については計り知れないところがあるよう思います。そして、私たちにとって、その一つが聖餐式でもあるのでしよう。それは、昨年2/9以来、私たちは主の聖餐の恵みに与れぬままに二年近くを過ごすことになったからです。そして、その私たちが今日、主の聖餐の恵みに与ろうとしているわけですが、それゆえ、この恵みをしっかりと味わいたいと思うのです。そこで、この恵みを味わうためにも、今日は一つのことを確かめたいと思うのですが、それは、このコロナ下、あれほど大事大事だと言っていた主の聖餐に私たちは与れなかったわけですから、普通に考えれば、当然、計り知れないほどの影響があったはずだからです。そして、その一番の影響は、私たちが霊的飢餓状態に置かれたということでもあります。けれども、それについては、皆さん、いかがでしたでしょうか。その間、霊的に飢えや渴きを覚えたでしょうか。また覚えたとしたら、それはいつくらいからだったのでしょうか。けれども、それについては、私の方にはどなたからも何も仰ってこられることはありませんでした。それは、皆さんが一様に飢え渴きを覚えることがなかったからなのでしょう。そして、私自身のことについて申し上げるなら、私も皆さんと同じです。それは、私がこっそり一人で主の聖餐に与っていたからではありません。ただ、飢えと渴きを覚えなかったということは、それ自体は喜ぶべきものでもあり、けれども、もちろん、それで良しとする話ではありません。

そこで、もし私たちがコロナ以前の状態の中からこの二年近くの間自分たちの有様を見たらどういうことになるのでしょうか。私自身のことを申し上げるなら、黙っていられないだけでなく、そういう自分自身に掴みかかったことでしょう。しかし、コロナの当事者として申し上げれば、この二年近く、そこには様々な現実があり、様々な思いがありました。

それゆえ、聖餐式を見送るに当たっては、そうすることの明確な理由が立ったわけですが、けれども、断腸の思いでその決断をなしたわけではありません。ある意味で仕方ないこと、当然のこととして、牧師である私自身がそのように判断したわけですが、しかし、そのように判断したとしても、すべての教会が私たちと同じように中止としたわけではありません。そのため、緊急事態宣言下であっても、礼拝を非公開とすることなく続けた教会もありました。それゆえにまた、聖餐式も同じように執行し続けた教会もありました。ですから、その判断はとても勇気のいることであつたと思いますし、また、信徒の協力なしには決してできなかったことであろうと思います。けれども、その反対に、私たち藤沢教会はそうではなかった。けれども、それは私たちに勇気がなかったからではありません。どのような判断を下すかは現状を鑑みてのことであり、しかも、置かれた状況は個々まちまちで同じではないわけですから、他と比べて、ああだこうだと言うべきものではありません。ただし、そこで私たちが忘れてはならないことが一つあります。それは、この二年近く、私たちが聖餐の恵みに与ることができなかったというこの事実です。

私たちは与らなかつたのでしょうか、それとも、与れなかつたのでしょうか。コロナ下という不測の事態を考えれば、与れなかつたとも言えるのですが、英断か、無謀かは兎も角として、実際に聖餐の恵みに与り続けた人々も確実にいたわけですが、それゆえ、与った人たちからすれば、私たちは、与らなかつたとも言えるのです。そのため、私たちは、そんな私たちのことを人がどう考えているのかがとても気が掛りでもあるのですが、それは、与らなかつたにせよ、与れなかつたにせよ、与ることができなかったというこの事実は、私たちが従来言っていたこととの間に大きな齟齬を生じさせるからです。ですから、これについては、な

おざりにすることはできません。しかし、この矛盾については、私は、それほど気にする必要もないと考えます。それは、私たちは傍観者でもなければ、評論家でもないからです。イエス様を頭とする教会に繋がる、言うなれば、信仰ゆえに永遠の命に生きている、主の教会の生活者であるからです。

それぞれが胸に手を当ててお考えいただければ分かることですが、生活することとはどういうことなのでしょう。そこで、私たちが避けて通ることのできないものがこの矛盾というものでもあります。それは、常に現実と対峙させられているのが生活というものであるからです。従って、そうである以上、理屈通りには行きません。ですから、そこで大事なことは、現実には振り回されることではなく、現実を現実としてしっかり受け止め生活し続けることです。そして、そのために大切なことは、生活を共にする者同士の関係性が損なわれないこと、つまり、生活を破綻させないということです。けれども、だから、なし崩しに何でもかんでも現実に流されていいということではありません。建前、原則というものをなし崩しにすれば、これまで積み重ねてきた経験が全て台無しとなってしまうことがあるからです。まただから、そうした中で生じた矛盾を人は自分の力で解決したりもするのですが、けれども、生活する上で生じた矛盾を自分だけの狭い考えで無理やり纏め上げようとするればどうということになるのでしょうか。矛盾の上に更に矛盾が積み重なって、返って問題が複雑となり、收拾つかないことになるのです。時に、私たちが形式論に陥りがちなのはそれゆえのことでもあります。まただから、仏作って魂入れずとの状態を生じさせることにもなるのです。

従って、皆さんご存じのいわゆるオープン聖餐と言われている教団内の問題は、そういう意味では、矛盾を矛盾として受け止め切れなるところから生じたことであり、いわば、信仰者としての生活感を欠いたことがその一番の理由であると思います。つまり、教会の歴史という長い文脈の中で物事を考えることができず、そのため、長年培われてきた私たちの生活者としての視点を欠いたがゆえに

傍観者、評論家のようになってしまったということです。まただから、代々の聖徒たちが築き上げてきたライフスタイルを大切にすることができない、このように、問題の根は、生活者の視点を欠いたところにあるように思うのです。しかし、その一方で、聖餐の重要性を説く人たちはどうか、話を聞いていて、それが生活に根ざしているかといえ、そうとは思えません。確かに正しいことは言うてはいるのですが、形式論に傾きすぎて、その生活実態が見えてこない、それは、やはり、同じように生活者の視点が欠けているからだと思います。ただ、いずれにせよ、そのそれぞれが私たちの今のこの暮らしの中から出て来たことは間違いのないわけですから、私たち藤沢教会が同じ轍を踏まないためにも、答えを急ぐのではなくて、生活に根ざして一つ一つ物事を見つめるものでありたいと思うのです。そして、そのために私たちに求められているものが聖書を中心とした生活者の視点でもあります。それがあからこそまた、私たちは安きに流されることなく、私たちは私たちとして、いつもと変わらずに大切なものを大切することができるのです。

ですから、このコロナ下は、そういう意味では私たちがこの矛盾多きキリスト者としての生活を考える上でとてもいい機会を提供してくれたように思うのです。ただ、そのことを考えるためにも、今生じているこの矛盾を自分なりの考えで無理に纏め上げるのではなく、その前に先ずはすべきことがあるように思うのです。そのことに気がつかされたのは、再開に当たって与えられたこの日の御言葉を通してのことでもあります。それが今日イエス様が最初に仰っているこの言葉です。イエス様はそこでこう仰っています。「求めなさい、そうすれば、与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。門を叩きなさい、そうすれば、開かれる」とこう仰るのですが、ところで、聖餐に与ることのできなかつたこの二年近くの間、私たちは心の底からその機会が与えられることを求めたでしょうか。そのための機会を探そうとしたでしょうか。また与えられることを信じて、門を叩き続けたでしょうか。つまり、この重大な事柄と向き合う上で私たちはど

れだけ祈ったのかということでもありませんが、ですから、与らなかつたのか、それとも与れなかつたのかを気にする前に、この祈りについて心に止めたいと思うのです。なぜなら、私たちの生活者の視点の一番根底にあるものが祈りでもあるからです。従って、飢え渴きを覚えることがなかつたのは、私たちが霊的に満たされたからではありません。イエス様と共にある生活を当たり前のように受け止めていたからだと思うのですが、ですから、これについては、私たちはよくよく悔い改める必要があるのでしょうか。けれども、先ほど、それについてはあまり気にする必要もないと申し上げたわけですが、それは、今日、私たちが心に留めるべきことがそういう私たちの不作為についてではないからです。その不作為を受け止めつつも、その私たちがそれにも関わらず、主の食卓にこうして今までと同じように招かれているということ、このことをしっかり受け止めたいと思うのです。

ところで、ほぼ2年近く主の食卓に招かれることのなかつた私たちであります。コロナ以前、当たり前のように与ってきた主の聖餐の味を皆さん覚えておられるでしょうか。主イエスの味はどんな味だったのでしょうか。それは、皆さんにとって、満足いく味だったのでしょうか。それとも、物足りないものだったのでしょうか。あるいは、良薬口に苦しではありませんが、思わず吐き出したくなるほどまずいものだったのでしょうか。こんなことを口にすると、聖餐の恵みをうまいまずいで語るのはなんたることかと、コロナ下でなければ、きっと偉い先生方からお叱りを受けることにもなったのでしょう。それは、主の聖餐の恵みは、私たち信仰者にとっては、感謝して黙っていただくべきものでもあるからです。ですから、それを言われると、それはその通りでもありますから、返す言葉もないのですが、コロナ下ゆえに、偉い先生方にお会いすることもほとんどありません。ですから、怒られる心配もないのですが、そこでお尋ねしますと、イエス様は黙って食べと言わんばかりに私たちをこの食卓に招いておられるのでしょうか。ここで、イエス様が「あなた方の誰が、パンを欲しがると自分の子どもに、石

を与えるだろうか。魚を欲しがると、蛇を与えるだろうか」と仰るように、神様にとって私たちは自分の子ども以外の何ものでもありません。ですから、私たちのことをイエス様が砂を噛むかのような、そんなつまらない、わびしい食卓に招かれることはありません。ということですので、黙って食べということは、一見すると正しいようにも思えるのですが、私はそれはやはり間違っているように思うのです。なぜなら、主の食卓において大切なことが、この黙って食べということであるなら、私たちの関心は他の別のものに向かってしまうことになるからです。つまり、食卓に並んでいるのは何か、それが自分にとってうまいかまずいか、さらには誰と一緒に食べるのかと、人によってはそれぞれその思いの異なる、そういう狭い所に向かうしかないからです。しかし、もちろんそうではありません。主の食卓において一番大切なことは、そこに築かれた豊かな交わりそのものであるからです。イエス様が「あなた方の天の父は、求めるものに良いものをくださる」と仰るのはそれゆえのことでもあります。つまりは、それが私たちの神様であり、それゆえ、私たちの生活感覚はこの神様との豊かな関係性の中で養われることにもなるのです。ですから、ここからもう一度主の食卓を見つめ直すなら、私たちの生活が実際どんなものなのかがもっとはっきり見えてくるようにも思いますし、また、その私たちの暮らしぶりがはっきり見えてくれば、その先についても、私たちはもっとはっきりとしたことが分かるようにもなると思うのです。

イエス様が「求めなさい。探しなさい。門を叩きなさい」と仰るのはどうしてなのでしょう。それは、私たちがいつも何か足りない状態に置かれているからです。つまり、常に何かに飢え渴き、満たされていないのが私たちであるということです。ですから、私たちがこうして暮らしていく中で矛盾が生じるのは、いつも何か足りないからで、そして、そのためにその足りないものをどうにかして埋めようとするから矛盾はますます大きくなっていくことにもなるのです。ですから、そのようなとき、経験の積み重ねである建前は、非常に役に立つ

便利なものとなるのでしょうか。それは、一見すると正しいことを言っているようにも見えますし、またそれは、私たちが少しでも早く問題根を断ちたいとも思うからです。従って、黙って食えと、つつい口にしてしまうのはそれゆえのことでもあります。ただ、黙って食うだけでは、この主の食卓を囲む私たちの豊かな暮らしぶりが、そこに現されることもありません。返って、その貧しさだけが際立つことにもなるのでしょうか。まただから、私たちは、あれがないとダメだ、これをしないと絶対にダメだ、とついつい口にしてしまうわけですが、ただ、その気持ちは分からないものではありません。けれども、そうであればこそまた、時に神様はちゃぶ台返しをするかのように、私たちの生活を根底から見直すようなことまでなさるのです。イスラエルの人々にとって、それがバビロン捕囚というものでもあります。けれども、それでも崩れることがなかったのが神様に導かれる私たちの生活でありました。

コロナ下にあって知らされたことは、私たちのこれまでの暮らしが同じようにいつまでも続いては行かないということでした。そして、その私たちが聖餐式を再開するに当たって聞いている御言葉が今日のイエス様のお言葉でもあります。が、これまでの暮らし方をいわば強制的に変えざるを得ない私たちに向かって、イエス様はこう仰るのです。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」とこう仰るのです。それは、イエス様が「だから」と仰っているように、それが、私たちがイエス様との今のこの暮らしを大切に作る上で、決して欠かいてはならないものだからです。なぜなら、このイエス様のお言葉の上に築き上げられるものが私たちの生活でもあるからです。まただから、私たちは、生活のその中心に、イエス様が私たちに日々語りかけられるその言葉を置くのですが、それゆえにまた、私たちがこうして招かれるこの食卓によって、私たちの暮らしは支えられることにもなるのです。しかし、それだけにまた、そこには様々な問題が渦巻くことにもなるのです。それは、それにもかかわらず、私たちは「お先にどうぞ」とはなかなかすぐには口にするのでき

ないからです。ですから、御言葉と主の食卓によって養われる私たちにとって、このイエス様との暮らしは、そういう意味で自分自身を変えられることでもあるのです。まただから、イエス様は、その直ぐ後で「狭い門から入りなさい」と仰るのですが、従って、このイエス様のお言葉が示すように、自分自身を変えられるというこの窮屈な思いを、私たちは避けることはできません。

ですから、この窮屈なところだけを見るなら、イエス様との暮らしを人様が良いものだとはなかなか思えないのでしょうか。けれども、それを外側から眺めているのではなく、その内側で日々体験しているのが私たちでもあるのです。そのため、イエス様が十字架を経験されたように、私たちもまた大きな変化を経験せざるを得ないこともあるのですが、けれども、時に自分自身を殺すかのような経験をするからこそ、私たちは生活者として成長し、相反するものを一つにまとめる知恵と力を身につけることにもなるのです。そして、そこで与えられる知恵と力とは、イエス様が私たちに食卓に招かれたように、人を信じるということだと思ふのです。ですから、そんな私たちのことを見て、よそ様は、時に「心ある人」と呼んだりもするのですが、つまり、心あるとは、イエス様がそうであるように、現実をしなやかに受け止め、絶望の中にあってもなお希望を見失わないということ。私たちがイエス様との暮らしを通して日々教えられているのはこのことであり、そのことを教えようとして、イエス様はこの日、私たちを再びその食卓へと招いてくださっているのです。ですから、このコロナ下、これまで本当にいろいろありましたが、イエス様はこの日その私たちを変わずに食卓へと招いてくださっているわけですから、そのことを感謝し喜ぶものでありたいと思うのです。そして、私たちがこの変わらぬイエス様の気持ちをしっかりと日々受け止め歩むなら、私たちはいつの間にかイエス様のようになっていくことにもなるのです。なぜなら、生活を楽しみ、その暮らしを喜ぶということはそういうことでもあるからです。祈りましょう。